

『文芸倶楽部』における新作落語募集という現象

小林陽平

目次

はじめに 新作落語募集という現象（問題意識・研究対象・研究方法）

第一章 「改良」をめぐる言説

（一） 演劇と改良における「改良」の言説

（二） 明治二十年代～三十年代の落語界

（三） 『文芸倶楽部』における「落語改良」の言説

第二章 新作落語募集における『文芸倶楽部』というコード

（一） 『文芸倶楽部』とは

（二） 選者というコード～石橋思案と海賀変哲

（三） 新作落語の選評結果

第三章 新作落語募集の問題点

（一） みよしの家～新作落語投稿者のモデル

（二） 岡鬼太郎～新作落語作家

（三） 『懸賞小説の時代』からみる新作落語募集の問題点

最後に

参考文献目録

※本論文で引用を行う際、漢字の表記・ルビは引用元を参考とする。

※本論文で呼称を用いる際、尊称は用いない。

はじめに 新作落語募集という現象

問題意識

一九〇五年（明治三十八年）『文芸倶楽部』は新作落語を投稿するように読者に働きかけた。『文芸倶楽部』創刊号で、「懸賞課題」と題して読者から俳句や都々逸を募集し、その後も写真や小説など様々なものを募集していたことを考えれば、この企画自体は『文芸倶楽部』にとってなんら不思議なものではない。

しかし、『文芸倶楽部』という雑誌だけに焦点をあてるのではなく、落語と新興文芸メディアとの関わりについて焦点をあてることで、まったく新しい一面が現れる。

一つの例ではあるが、新作落語の募集をするという現象には、落語が速記化されることによって、落語の演目が台本化したという時代背景を読み取ることができる。三遊亭円朝の『怪談牡丹灯籠』を始まりに、落語は寄席で体験するだけでなく、文芸メディアを通して読むという体験も可能にした。それまで落語を体験するには寄席に行くことでしかできないものであった。しかし、速記術と新興文芸メディア（この場合は新聞・雑誌）の発達・一般化によって落語は寄席に行かなければならないという常識が、紙面でも落語を疑似体験することが可能になり覆された。この疑似体験が生まれた時代だからこそ、逆説的に、詩や小説のように、読者に落語を作らせ投稿させるといふ発想が生まれたといえよう。

このように、新作落語の募集が行われた背景には、新興文芸メディアの誕生だけでなく明治という時代が内包した、時代の変化が前提としてあることを考えるべきである。本論文では新作落語の募集という現象をさまざまな形で検証する。

研究対象・研究方法

今回の論文では、まず第一章で新作落語の募集を生むに至った、明治十年代以降の「改良」という言説を調査し、その変遷を追う。また、当時の落語界がどのような状況にあったのか、先行研究を交えてまとめる。

第二章・第三章においては、『文芸倶楽部』での新作落語募集の動きを調査する。『文芸倶楽部』での新作落語の募集は一九〇五年（明治三十八年）から一九二二年（大正十一年）にわたっており、この企画に応じて掲載された新作落語の数も五十件に及ぶ。作品それぞれの傾向を追うのではなく、第二章では投稿された新作落語の選評していた石橋思案・海賀変哲、二名の『文芸倶楽部』編集者に焦点をあてて、新作落語募集に隠されたコードを調査する。

第三章では、実際に掲載された新作落語の中でも、掲載回数が多い二人の作者を調査し、新作落語の募集における問題点を取り上げていく。

第一章 「改良」をめぐる言説

（一） 演劇と改良における「改良」の言説

明治期における「改良」

明治期において、「改良」という言説は度々用いられていた。単語の初出文例を掲載することでは有名な、日本国語大辞典第二版を参考にしてみると、「改

良」という言葉が『日本開化小史』の「其制度の弊習を改良せんと企てつるも」という文例にぶつかる。『日本開化小史』自体は一八七七年（明治十年）から一八八二年（明治十五年）の間に刊行されており、「改良」という言葉が明治初期の日本において生まれた、文明開化を象徴する言葉であることがわかる。

『文芸倶楽部』で新作落語の募集を行った際に、注目すべき記事がある。それは一九〇五年（明治三十八年）五月一日の『文芸倶楽部』第十一巻第七号で掲載された「落語の改良」である。この記事が掲載されて以後、『文芸倶楽部』は読者に新作落語を投稿させるに至った。

残念なことに「落語改良」について言及している選考資料は、『口演速記 明治大正落語集成 第五巻』の付録記事「改良落語のこと」（武藤禎夫）しか見当たらない。「演劇改良」の最新の研究については、倉田喜弘の『芝居小屋と寄席の近代 「遊芸」から「文化」へ』や神山彰の『近代演劇の来歴 歌舞伎の「一身二生」』が出版されているが、いずれも二〇〇六年の発行となっている。神山が同著で、「この二十年ほどの間に、多くの「芸術」分野で「近代」「日本」の「文学」や「美術」の起源や文脈の検討がなされてきた。だが、「演劇」については、ほとんど触れられなかった」と記しているように、明治初期における「演劇」の研究については現状としてあまり進んでいないことがわかる。しかし、研究対象とすらされていなかった「落語改良」にどのような文脈が含まれているかを把握するには、少なからずも先行研究がある「演劇改良」を参考にすることが有効だと考えられる。本章においては「演劇改良」にまつわる言説の変遷を調査し、当時の落語界がどのような状態に置かれていたかまとめ、どのような経緯で「落語の改良」が掲載されたのか考えていきたい。

「演劇改良」の言説を生んだ事情（明治二十年代）

明治期において使われ始めた「改良」という言葉は様々なところで用いられた。例えば、読売新聞のDB『ヨミダス歴史館』を用いて、「演劇改良」というキーワードで記事検索を行うと、一八八六年八月七日（明治十九年）の「雑譚 演劇改良会の趣意書を読み所感を記す」に始まり、一九〇八年（明治三十一年）の「川上の演劇改良談（下）日本風俗の侵入▽西洋劇場の欠点▽帝国座の装飾 ほか」まで、三十二件の記事を見つけることができ、同じく「改良演劇」というキーワードでも一八八七年（明治二十年）の「社説 改良演劇の俳優」から、一九一一年（明治三十三年）の「川上音二郎の生涯 博多生まれ、玄洋社、壮士、改良演劇・・・多事多彩」まで、二十六件の記事に見受けることができる。あわせて五十八件の記事を明治二十年代から三十年代にかけて、改良にまつわる言説が歌舞伎を中心としておこっていたことがわかる。

現代では死語と化した「演劇改良」（または「改良演劇」という言説は新聞以外にも一般書籍の世界においても一般化しており、『演劇改良論集』（クレス出版・一九九六）に掲載されている当時の論文をみると、ほぼ同時期において多用されていたことがわかる。具体的な演劇の改良については、倉田喜弘の『芝居小屋と寄席の近代 「遊芸」から「文化」へ』（岩波書店・二〇〇六）に詳しいので、概要を以下に記す。

一八八六年（明治十九年）七月十一日付の『郵便報知新聞』において、当時の総理大臣である伊藤博文が市川団十郎や尾上菊五郎と面会したことが記事化されている。伊藤は二人に対し、「外国の使臣」が東京を遊覧しても満足な劇場が一つもなく、外聞が悪い上に「国ノ実益ヲ害スル」から、二人に「小闘ヲ止メ」仲良くして演劇の改良に努めて欲しいと依頼するというものだ。

また、同年七月二十四日付の『改新新聞』において、伊藤が末松謙澄（内務省参事官）と福地桜痴（東京日日新聞社長）を招き、上演する作品について意見を徴した記事が掲載されている。ここでは、二人が西洋の事蹟を翻案して「文明国に愧ぢざる新狂言」を河竹黙阿弥に書かせ、一八九〇年（明治二十三年）に新築予定の大劇場で上演する趣旨の計画を話し合つたとするものであつた。

一八八六年八月五日から六日にかけて、伊藤博文が演劇に関与するという報道は続き、「演劇改良会」を設立するニュースと趣意書が世間に伝わる。八月七日付けの読売新聞でも、趣意書の掲載と「演劇改良会」の世話人、発起人および賛成員六十九名の名前が報道される。世話人には末松謙澄、発起人には外務大臣井上馨、文部大臣森有礼のほか、各界から選ばれた二十一人。さらに賛成員として、伊藤博文、大隈重信らの豪華な顔触れが並び、総計で四十七人が名を連ねている。趣意書の内容を以下に掲載する。

- 第一 従来演劇ノ陋習ヲ改良シ好演劇ヲ實際ニ出サシムルコト。
- 第二 演劇脚本ノ著作トシテ榮譽アル業タラシムコト。
- 第三 構造完全ニシテ演劇其ホウ音楽会、歌唱会等ノ用ニ供スベキ一演技場ト構造スルコト。

「演劇改良会」を中心とする「演劇改良」の、その後の経緯については詳述を避けるが、先述した倉田の研究によれば、一八八七年（明治二十年）に演劇天覧を成功させ、明治二十三年に川上音二郎一座で男女共演の申し込みに対し、不問にしたことで、男女共演で演劇を行う既成事実を作り出した成果を挙げている。一方、歌舞伎座の新設をめざしていたが、金銭的な理由のために頓挫してしまっている。いずれにせよ、「演劇改良」の言説によって歌

舞伎をはじめとする演劇を近代化することに成功したといえよう。

「演劇改良」によって始まる「落語改良」の言説（明治二十年代）

「演劇改良会」の発足に伴う「演劇改良」の言説が活性化することで、落語の「改良」に関する言説が生まれた。一八八六年（明治十九年）九月十一日付の『団々珍聞』において、櫻亭花叟の「寄席ノ改良」が掲載される。

既二諸君モ先刻御承知ノ通りデゲシテ上ハ法律制度ノ改良ヨリ下ハ教育衛生風俗ニ至ル迄行届カナイ處ハ充分ニ改良ノ上ニモ改良ヲ加ヘンケレハナリマセンガ聞ケバ此頃朝野ノ紳士貴顯方ガ思付キニテ演劇改良会ナルモノヲオツ初メラレタサウデスガ拙モ一個ノ男子ダカラ何カ一ツ天下ニ率先シテ事物ノ改良ト出掛ケタイモノ

本文はこの後に、同年八月に発表された「演劇改良会」の趣意書に触れながら、落語を初めとする寄席諸芸の改良について論を進めていく。中には「其家屋ノ構造ノ如キモ随分不都合ナ處多ク」のように、趣意書をパロディ化した文章も見受けられる。主題としては国を挙げて「演劇改良」の運動を進めるよりも、早急に帝国議会開設を目指すべきなのではないかというものだ。当時としては、落語の改良も演劇の改良も、国会開設の問題と比較すれば、同程度の瑣末な問題であったことも伺え、興味深い。

増殖を始める「落語改良」の言説

しかし、時代が下るにつれて落語の改良という言説が「演劇改良」の言説

と同じく一般化し始める。『ヨミダス歴史館』にて「落語」「改良」をキーワードで検索すると、二十七件と「演劇改良」の検索結果よりは少ないが存在はする。また、「演劇改良会」のように政府の介入によって活動が始まったものではないので、その活動規模は小さいものがほとんどである。初出のものとして一八八九年（明治二十二年）三月八日付の「落語家の激論」がそれにあたる。この記事は五明楼玉輔という落語家が観客と口論をしたことを扱ったものであるが、記事の内容によると当時の五明楼玉輔が「改良落語」と称して、「高座の中央に卓子を置き洋服にて椅子に掛り諸君と呼び演説口調で話し掛」ける落語を行っていたことがわかる。記事の様子では「改良落語」自体は五明楼玉輔の新趣向であり、どのような改良意識があったかは判別がつかない。しかし、意図するところにかかわらず、落語を改良するという言説は増殖していく。

一八八九年（明治二十二年）十一月七日付の「最近出版書 改良滑稽落語」もまた、初期の「落語改良」の言説を知るものとなっている。本文は「本書は例の桃の屋宗匠が新古自他の滑稽談即ち落語の面白きもののみと纂述せられしものなり下手な人情小説をがまんして讀むより罪なくして斯の如きものの方余程面黒し」と『改良滑稽落語』を紹介している。

桃の屋宗匠こと桃の屋鶴彦、本名は飯野忠一という旧幕臣で、明治調の先導者として活躍した本町側判者の重鎮狂歌師である。同著の文頭には、安楽庵策伝をはじめとする落語の歴史から、当時の落語界の状況に触れている。

近時は人情の續談話には新体を出ししものあれども却て落語には乏し
きが如く依然として古人の糟粕を嘗るもの巨多に居りし儘又其口氣も卑野
に傾きて動もすれば赤地扇を開きてヘラヘラを唄ひ半股引を穿ちてステ
テコを踊るなど宛然幫間者の技藝に等しく落語の範圍を脱出んとする

三遊亭円朝をはじめとする長編人情噺が全盛であるのに対し、落語と称されるべき滑稽な話芸については、古人が作ったものばかりであり、また「ステテコ」や「ヘラヘラ」と言った野卑な珍芸が多く流行している当時の状況を記している。そうした状況を嘆いて桃の屋が改良した落語をまとめたのが本著であると以下に記されている。

斯る景情なるからに遂には紳士淑女の聴くを厭う所となりて自然下等社會の玩弄物と成行しは此道に取り最も嘆惜むべきことにぞある、是故に其弊風を矯め其品位をも高めんとて演藝協会の發起ありて専ら改良の途に就きたるに際し拙生亦同感の情に堪へず試みに古作の廃れたるものを刪潤して該會に提出し或は新規に作り出せる

同著は好評となり、翌一八九〇年（明治二十三年）二月に第二集を出版した。

落語家の改良への適応

『改良滑稽落語』が読売新聞で宣伝されたのと時を同じくして、東京では「改良」の名前を冠した落語会・演芸会が多数開催されるに至る。『ヨミダス歴史館』によれば、一八八九年（明治二十二年）の間に「改良演芸会」が四回、同年「東京改良演芸会」が一回と報道されている。「改良演芸会」については、詳細は記事からうかがい知れないが、「東京改良演芸会」の様子は『芝居小屋と寄席の近代』で触れられているので紹介したい。

二一年正月早々、渋沢栄一や三遊亭円朝らの発起で改良演芸会社が設立、寄席の改良を図ろうという動きが芽生える（一月八日付『時事新報』）。翌年、今の中央区日本橋蛸殻町に有楽館を建て、二十二年十月五日から二日間、「東京改良演芸会」の開業式を行った。北白川宮をはじめとする皇族や土方宮内大臣ら政府首脳陣も居並ぶ中で、東京府知事と帝大総長が祝辞を述べる。そのあと、講談、落語、音曲、舞踊が演じられた。

興業が成功したかについても詳細は新聞記事からは判別できないが、右記のような盛大な会を報道する記事が、その後途絶えたことから、「改良演芸会」も「東京改良演芸会」も双方とも頓挫したことがうかがえる。

一八九二年（明治二十五年）六月には「改良落語会」が発足されるが、これも同年の八月には記事による報告がなくなっているので、「改良」をめぐる落語家の適応は継続的なものではなかったであろう。

（二） 明治二十年代～三十年代の落語界 明治二十年代の落語界

以上で見てきたのが明治二十年代における「落語改良」にまつわる言説の動きである。ここで一度、明治二十年代から三十年代が落語にとってどのような時代であったのか、暉峻康隆の先行研究を踏まえながら確認しておきたい。

まず、明治二十年代は落語が速記により、文芸メディアで掲載されること、が一般的に成ってきた時代だと言える。『口演速記 明治大正落語集成 第一巻』の「編集総説」を担当した暉峻によれば、一八八四年（明治十七年）三遊亭円朝の『怪談牡丹灯籠』が東京稗史社から出版されることにより、初めて落語が速記化されることになっている。その後も、継続的に円朝の速記が

書籍化されるなかで、一八八六年（明治十九年）には『やまと新聞』創刊号から、円朝作の「松の操美人の生埋」が掲載される。暉峻は当時の状況を「やまと新聞」だけでなく、「怪談乳房榎」は「東京絵入新聞」に、「名人長二」は「中央新聞」というふうな、二十年代の商業新聞の連載小説は、ほとんど円朝の速記オンパレードの観がある」とまとめている。その理由を「円朝の人情咄が江戸戯作とちがって当世向きの文体・趣向であった上に、三十席、四十席と続くトリネタであったことも、新聞の連載小説としての適応性を持っていた」のではいかと推測している。

また、一八八九年（明治二十二年）になると落語・講談の速記雑誌『百花園』が創刊される。第一号に掲載された落語家は三遊亭圓朝、三遊亭円遊、三遊亭円生となっている。『百花園』が一八九九年（明治三十三年）までに二百四十冊を続刊することになるが、読み物としての落語・講談の需要の高さが窺える。同じく一八九五年（明治二十八年）、『文芸倶楽部』が創刊される。『文芸倶楽部』については後章で触れるが、創刊から二編目で早速講談師・桃川如燕の「雑録 可庵武精の話」が速記として掲載される。落語自体が掲載されるに至ったのは、一八九一年（明治三十年）、三遊亭円遊の「全快」というタイトルのものである。これらの事象の背景には、先述の「編集総説」での暉峻の言葉を借りるならば「落語・講談の速記そのものが、大衆文学不在の明治時代における、大衆文学としての役割を果たして」いたということだ。

また、そうした出版メディアとの関わりを強めていく中で、その後の落語のあり方に影響を与えた三遊亭円遊も、明治二十年代を象徴する存在として挙げることができる。前述の通り『百花園』の創刊号で、『文芸倶楽部』で初めて速記が掲載された落語家は三遊亭円遊であることから、文芸メディアにおける円遊に対する需要の高さが窺える。円遊の評価されるべき点は、そ

れまでトリネタは続き物人情咄でなければならないという落語界のしきたりに対して、落語の新作・改作の滑稽咄をトリネタにまで作り上げたことがあると、暉峻は『落語の年輪』において分析している。左に挙げるのは暉峻が調査した『百花園』に掲載されている落語の種類である。

明治二十二年（一八八九）五月の第一号から二十四年五月の五十号までの「百花園」をしらべてみると、円生や文楽や柳櫻や燕枝や円朝などは、たとえば「花曇中も宵月」（円生）、「袖ヶ浦浪路水髪」（文楽）、「大久保曾我誉迺讐討」（柳桜）など、もっぱら続き物人情咄や敵討物をやっている中で、円遊はもっぱら文字通りの落語をやっている。

成田小僧、乾物箱、鼻毛、王子の幫間、恵方詣、入れ髪、お七、つよがり、二階の間男、初音の鼓、牛の嫁入り、臍かじり、素人洋食、ずっこけ、疝気の虫、工風の医者、穴庫泥棒、樟脳玉

この様に円遊は、滑稽な落語で多くの落語家と渡り合い、そして存在が認められていたことがわかる。

明治三十年代の落語界

『落語の年輪』において暉峻は「明治の東京落語界の厄年ともいうべき三十三年度をもって、人情咄や怪談咄の続き物時代は、事実上終わったといつてよい」と表現している。何故暉峻は一九〇〇年（明治三十三年）が「明治の東京落語界の厄年」と呼んだのか。それは、三遊亭円朝を始め、談洲楼燕枝、麗々亭柳橋、春風亭柳枝といった多くの落語家が相次いで没してしまつたからである。前章で記したように、これらの落語家が長編人情咄を創作し

ていた。また、その後進の落語家が長編人情咄を創作することを辞め始めた時期にあたるのだ。一九〇五年（明治三十八年）十月十五日付の『文芸倶楽部』第十一卷第十四号において、柳亭燕枝が「今戸の狐」のマクラで当時の様子を語っている。

著述家と話術家とは相違のあるものだといふことを申し上げますが、我々同業者でも、随分話を作らへる力のあるものが、昔から沢山ございました。併し其の人達が高座へ登つて、必らず話が巧いかといふと、何うも餘り巧いといふ方は少ない。近年故人になりました圓朝、先代燕枝の如きは随分話も作り、高座へ登つても巧かったのでございますが、是等は誠に稀で、作が上手で些とも御喋舌の出来ない方が多くあります。

一九〇五年（明治三十八年）の時点で、長編人情咄を創作すること自体が、落語家の中で過去のものとなりつつあったことがうかがえる。

また、一方の三遊亭円遊であるが、明治二十年代に同じアプローチで滑稽咄のレベルアップを図っていた同士・禽語楼小さんが一八八八年（明治三十一年）に没する。その後も円遊は精力的に活動を続け、『文芸倶楽部』誌上においても明治三十年代だけでも、二十一編の速記を載せているが、一九〇七年（明治四〇年）に没することになる。三遊亭円朝が象徴とした明治二十年代の長編人情咄の時代から、三遊亭円遊が象徴する明治三十年代滑稽咄の時代へ。円遊が示した方向性は影響力が多かったと言える。

「落語研究会」の発足

もう一つ明治三十年代の落語界において、多大な影響を与えた出来事がある。

った。それは「落語研究会」の発足である。一九〇五年（明治三十八年）三月二十一日、日本橋の常磐木倶楽部にて「落語研究会」の第一回発表会が開かれた。同年三月二十二日の『萬朝報』において、記事にされている。

近來落語社會の演藝其のものが墮落し、高座で己の缺點を奇癖としてむやみに賣物とするので、在來の落語の妙味を害ね愈よ衰頽に傾く形勢だから、正義派は躍起となり藝風の矯正を圖る爲、其の發會を昨日正午より日本橋常磐木倶楽部で開催した

「落語研究会」の成立は、参加する落語家がどれも著名だったために、『萬朝報』だけでなく『読売新聞』でも記事にされている。同年三月二十六日「落語研究会所感」がそれにあたる。

去る春季皇靈祭に常盤木倶楽部にて第一回落語研究會が開かれた。奮いもののみ並べて研究會といふのはどんな譯か分らぬが、何しろ今日落語家の撰抜きばかりを集めたのだから、何れも面白く、吾人はこの會の永續して、平民に一日の娛樂を與へんことを切望する。

このように他紙でも取り上げられたのには、『読売新聞』の記事からもわかるように、当時「撰抜き」とされていた落語家が出演していたことだ。同年五月一日発行の『文芸倶楽部』において、岡鬼太郎の「割看板」に「落語研究会」の成立事情が詳しく掲載されるので、以下に記す。

發起人は三遊派の圓右、圓藏、小圓朝、圓左、圓喬、柳派の小さんと斯う六名、萬事の肝煎は、速記者として有名なる今村次郎子。

(中略) 事の起りを尋ねれば、藝道熱心の圓左が、豫て懇意の今村子と相談して、何か落語の本筋を遺す方法をと云ったが始まり、これから圓左が彼方此方と奔走して、此の主意を傳へると共に、固より結構大賛成と、連判に加はったが外の五人。何れも今日の落語の墮落を口惜しがり、飽くまで本筋を遺す傍ら、新作物を世に出さんと、血汐の代りに茶を啜りて、唯一會にて事決着。

また、同「割看板」によれば、当日二百名の観客が入り、第二回の「落語研究会」では三百名近くの観客が入ったとされている。先述の通り、それまで「改良演芸会」や「東京改良演芸会」といった会が発足されることは度々あったが、一年以上記事が続くことはなかった。しかし、「落語研究会」の記事は根強く継続的に掲載されていく。「落語研究会」が一九二三年(大正十二年)九月の関東大震災で中絶されるまで、毎月開催された。「本筋を遺す」という意図が観客とどの程度共有されていたかはわからないが、「落語研究会」が有していた意図は、明治三十年代を象徴する三遊亭円遊の滑稽だけでは物足りない観客を惹きつけたのであろう。

(三) 『文芸倶楽部』における「落語改良」の言説 『文芸倶楽部』による「落語改良」の言説―談洲楼燕枝―

以上で記してきた落語界を時代背景として、『文芸倶楽部』はどのように「落語改良」という言説を取り入れていったのか見ていきたい。実は、一九〇〇年(明治三十三年)二月一日の談洲楼燕枝による「講談 改良落語 世界一週」が掲載されるまで、落語を改良するという言説は一度もなかった。――

一九〇〇年(明治三十三年)四月十日に、同じく談洲楼燕枝による「講談

新作落語「庚申待」が掲載されているが、これといった差は見られないので「改良落語」、「新作落語」その使い分けに、これといった意味はないものと考えられる。「世界一週」については冒頭で「思の外（落語の）数が少ないもので有まして、追々と文藝倶楽部へ出しまして今は種切と云ふ有様に近付て参りましたやうです」とマクラを始めているように、『文芸倶楽部』やその他雑誌・新聞で速記が掲載されるために、新規な落語を作り出さなければならぬ風潮を感じさせる。落語家が初めて出会う雑誌・新聞と言った新興文芸メディアの登場に、戸惑いを隠せない様子が興味深い。「世界一週」の内容自体は隠居が知識を披瀝し八公があべこべの受け答えをする従来の落語の形式を反転させた、来客が隠居に知識を披瀝するというもので、新奇な趣向を目的としているだけであり、残念ながら現在では途絶えてしまった演目である。「庚申待」については、第二次世界大戦後にニッポン放送の専属となった、五代目古今亭志ん生によって口演されることでCD化され、現在では古典化された演目として認識されている。

談洲楼燕枝の速記掲載後、三遊亭円遊の「軍幫間」や快樂亭ブラックの「ピールの賭飲み」といった、新規に創作された落語が『文芸倶楽部』誌上に掲載される際には、「新作」や「改良」といった言葉は使われることがなかった。

ここで言う談洲楼燕枝は初代であり、同年同じく没することになった三遊亭円朝が三遊派の大看板であったのに対して、柳派の大看板となり多くの門弟を残すことになった。また、暉峻康隆の『落語の年輪』によれば、「圓朝におよばないにしても、演し物に工夫をこらし」、「島津島沖津白波」「御所車花五郎」と言った落語を創作していたことが分かっている。これらの演目は滑稽を主とする滑稽噺というよりも、寄席で連続数夜掛けて口演することが主である長編人情噺である。そのため、作風から言ってもいわゆる滑稽物である「世界一週」や「庚申待」が燕枝自身の創作物であったかは判断が難しい

ところではある。

奇しくも「世界一週」が掲載された翌月、談洲楼燕枝の訃報が記事化される。「庚申待」については前書きでも記されているように、燕枝への追悼を意味していたのであり、「新作落語」とタイトルを冠したことには特に理由はなかったようである。

『文芸倶楽部』による「落語改良」の言説と石橋思案「落語の改良」

一九〇五年（明治三十八年）五月一日の『文芸倶楽部』第十一卷第七号は、談洲楼燕枝の速記掲載以後かなりの時間をおいての「落語改良」にまつわる言説が登場した。しかし、それは時代を鑑みても、記事の構成を考えても、或る思惑を感じさせる作りとなっていることに注目したい。それは外史氏と石橋思案による「雑録 落語の改良」である。

何？落語の改良とや！そは餘りに古めかしき問題ならずやと、讀まぬ前から傍を向く人々も多いであらうが、改良の實を擧げぬ内は、此の問題を幾度も反覆さなければならぬ！

三遊亭圓朝逝き禽語楼小さん死せる後の我が落語界の萎微不振さは久しいもので、それこそ實にお話にもならぬので。

我が國の藝術界で何が一番進歩しないであらう？否、何が最も退歩したであらう？と言へば、躊躇するまでもない——遺憾ながら——落語と答ふる他はあるまい！

「改良」という言説自体が、当時においては既に時代遅れとなっていることが読み取れる。事実、一九〇〇年に入ってから『ヨミダス歴史館』におい

でも、「演劇改良」の言説が三年に一度出るか出ないかの程度になり、「落語改良」についての言説については先述の「改良落語会」の記事を最後に記事自体が消えてしまっている。「改良」をめぐる言説が古めかしくなっている原因が、「演劇改良」の言説に由来すると考えるべきである。伊藤博文が「文明国に愧ぢざる新狂言」を、という趣旨で働きかけを始めたのが「演劇改良」であった。その系譜を引き継いでいるのが、今までの「落語改良」をめぐる言説であった。

しかし、石橋思案が提示する「落語の改良」には、欧米列強と比較した上で日本の文化を向上させるために、改良するという言説は存在しない。よりローカルな問題として、当時の落語が落語以外の諸般演芸と比較した上で遅れを取っているので、「改良」しなくてはならないという言説にすり替えがなされている。

では、当時の落語がどのような点において、改良されなければならない状態にあったのか。「落語の改良」において、落語が改良されなければならない理由を当時の落語家、聴き手の問題としている。

十年も……二十年も前とそっくり同じ話を為て、それで客が呼べると思
って居る渠等（落語家のこと）の了簡方からして先づ改良して行かなけれ
ばどうして落語界の進歩を企圖する事が出来やう？

（中略）また一方聴手の側から見ても、其の以前は随分舌を爛し筆を禿
にしてまで、落語改良の方法手段を講じた斯道の先輩も尠からずあつたが、
現今ではばったり其の跡を絶つて了つた

落語家については、三遊亭円朝や談洲楼燕枝ような存在であり、聴き手については桃の屋鶴彦のように新作を実際に行っていた人々を指すのであ

ろう。そのような状態で、石橋思案が落語の改良に最良の手段として提示しているのが、「落語研究会」の存在である。先述のとおり第一次「落語研究会」については、「落語の改良」と同時に『文芸倶楽部』に掲載された岡鬼太郎の「割看板」に詳しい。

石橋は「落語研究会」、ひいては落語の未来に対して「一臂の力を添へる事が出来たならば」という思いを込め、「落語の改良」で読者に新作の落語を募集し、良い作品については紙上掲載を行うことを発表した。更に「適當の落語家をして其の新作落語を研究会の席上に口演せしめて、恰く聴巧者の意見を徴する紹介の労を執っても可」とまで宣伝をしている。

「落語の改良」はそれまでの「改良」にまつわる言説とは異なり、読者に対し上意下達の改良論を提示するのではなく、『文芸倶楽部』、読者、落語家の三者が協力して改良しようと働きかける画期的な内容であった。

新作落語を募集せしめるに足る動機

「落語の改良」という記事が、読者に新作落語を投稿させるに足るものはいなかったのか。それは前項でも記したが「文芸倶楽部」の紙上に掲載することであった。しかし、何よりも重要だと思われるのが、作品によっては「適當の落語家を為て其の新作落語を研究会の席上に口演」させる可能性を示唆したことなのだと考えられる。それは、第二回目の落語研究会では演芸評論家である岡鬼太郎の新作落語が口演されることになったことから、読者の創作意欲を掻き立てるに足るものであったのだろう。

「落語の改良」から二ヶ月後、同年九月一日の『文芸倶楽部』第十一巻第十二号において初の投稿新作落語が掲載されることになる。「さる松」というペンネームの作者による「包み娘」という作品だ。詳細な募集規程がないま

ま告示された新作落語の募集は、「包み娘」を皮切りとして具体的な形となつていく。同号「包み娘」の次の記事で、応募形態などの細かい規程が発表された。左にそれを挙げる。

新作落語の募集！！

ただ口の先にて改良改良と申し續け居たりてもそれこそ改良の面に水にて、我が落語界は相變らず平氣なもの、些しの効能も有之間敷と信ぜられたるまま、本誌は茲に新作落語の募集を開始致したり。讀者の中に眞の滑稽を愛さるる方々は、何卒左の規定に依り、續々興味津々たる落語を新作して御寄稿被下度、本誌に掲載致したる上、落語研究會員に口演せしめ、落語界の改善を實地に試み可申たり、頓首。

一 寄稿の落語は新作に限り申候。

二 原稿は二十字詰二十行、總振名及び句讀を施し、二十枚以内に限り申候。

三 宛名は「博文館文藝俱樂部編輯局御中」と記され、改良落語の四字を傍書なさるべく候。

四 一度受け取りし原稿は、如何なる理由ありとも、一切返還不仕候。

五 掲載の上は相當の原稿料御送付可申上候。

「はじめに」でも記したが、『文芸俱樂部』は読者からの投稿作品を掲載する、読者参加型の雑誌であつた。そして落語を改良しようとする言説のもと、『文芸俱樂部』で落語の募集が行われることになった。また、この募集によつて具体的に改良すべき方向として、「滑稽」が重要なポイントに置かれてい

ることにも注目しておきたい。これも次章に譲るが、当時の落語界の情勢もさることながら、「滑稽」という言葉は石橋の嗜好に基づいたものだ。このように新作落語の募集は、当時の『文芸倶楽部』編者であった石橋と海賀の考え方がコードとして機能していた。

第二章 新作落語募集における『文芸倶楽部』というコード

(一) 『文芸倶楽部』とは 『文芸倶楽部』

前章においては、『文芸倶楽部』において「落語の改良」が掲載されるに至った経緯をみてきた。本章においては、『文芸倶楽部』とはどのような雑誌であったのか、また新作落語の募集に携わっていたのがどのような人物であったのか、そして新作落語の募集を規定するコードとはどのようなものであったのか、検証していきたい。

『文芸倶楽部』の創刊については、出版元である博文館の歴史をまとめた『博文館五十年史』に詳しいので、その文章を取り上げる。

「文芸倶楽部」は、当時文壇に覇を稱へたる硯友社一派の作家と密接の關係を保ちし為に、其の第一巻第一號は左の如き名作を集むるを得、之に加ふるに木板奉書十五六回の口繪と相待て、獨得の豪華を發揮した。

一八九五年（明治二十八年）に創刊された『文芸倶楽部』は、硯友社との關係が強い。当時の硯友社には尾崎紅葉を盟主として、巖谷漣山人、川上眉山、江見水蔭、石橋思案、渡辺音羽、廣津柳浪、山田美妙、竹内桂舟のメンバーが所属していた。『文芸倶楽部』第一巻第一号の目次を見ると、尾崎紅葉、

川上眉山、大橋乙羽などの名前を確認することができる。

作家を発掘する点においても『文芸倶楽部』が一役買っていたことは注目に値する。例えば同年、同じく博文館の雑誌である『太陽』において樋口一葉一作目の小説となる『ゆく雲』が掲載され、『文芸倶楽部』では第二作となる小説『にぎりえ』を掲載し、好評を博すことになる。翌一八九六年（明治二十九年）『たけくらべ』が『文芸倶楽部』に掲載される。同時代の雑誌『文学界』で既に掲載されたものだったが、『文芸倶楽部』に掲載されることで、再評価をうけることになった。

しかし、『文芸倶楽部』をはじめとする雑誌の発行元である博文館が当時の出版界において、注目すべき存在であったのは、独自の販売網を構築し日本全国に読者を作り出したことであろう。田村哲三著の『近代出版文化を切り開いた 出版王国の光と影―博文館工房六十年―』によると、博文館創業当時「出版流通は確立した組織ではなく、版元は書店に直接卸もしたし小売もしていた。また書店や取次店も、小売もやれば卸もやった。取次店もあったが規模が小さく、全国の書店に卸すことや、すべての版元を受け入れるほどの力はなかった」とあり、現在の出版界とはかなり異なった様相をしていた。『太陽』や『文芸倶楽部』のような雑誌や書籍の出版事業が急激に増えたことで、今までの販売方法では間に合わなくなり、博文館は独自の卸売りシステムを構築した。

田村によると「既存の取次店や地方の大書店を売捌所に指定して、特別大売捌所（東京堂、盛文館）、特約大売捌所（六四店）、特約売捌所（一二七店）、売捌所（九九五店）にランクづけしたものであった。この売捌所は創業三〇四年後には一〇〇〇店を越えた。売捌所はハワイに三店、アメリカ本土に四店、ウラジオストクに一店あり、海外にも進出していった。特別大売捌所、特約大売捌所には地方の二次卸権を与え、ピラミッド型の販売網を築きあげ

た」ことで、博文館が全国に読者を持つに至ったとしている。

(二) 選者というコード―石橋思案と海賀変哲

新作落語募集に関わった人物・石橋思案

新作落語の募集に関わった主要人物が二人いることがわかっている。それは、新作落語の選評を実際に行っていた、石橋思案と海賀変哲である。彼らの名前は後述する選評結果において連名で見つけることができる。ではその二人がどのような人物であったのか、記していく。

『博文館五十年史』に簡単ながらも、石橋と『文芸倶楽部』との関わりをまとめた文章があるので、以下に掲載する。

『文藝倶楽部』記者として入館したる石橋思案氏（通稱助三郎）は硯友社の同人で、小波、水蔭、眉山、乙羽の諸氏等と何れも莫逆の友であつた。慶應三年六月二日生、父は石橋政方とて、長崎の人、明治政府に仕へて太政官書記官にまで進んだ。助三郎は思案外史と稱し、都々逸及滑稽文學に長じ、中央、讀賣二新聞の記者の経験を経て、（明治）三十五年十二月に入り、其頃退館したる三宅彦彌氏に代つて『文藝倶楽部』を擔任した。

右記の文章にもあるように、石橋は『文芸倶楽部』誌上において、都々逸に関する論文（『文芸倶楽部』第二編「都々逸文学講義」）や選評、滑稽文学についても論文（『文芸倶楽部』第四卷第二編「通俗滑稽学講義」）を残すなどの活躍をしている。

一八八五年（明治二十八年）一月二十五日の『文芸倶楽部』創刊号では、文頭の「文芸倶楽部略則」において、「大日本文藝倶楽部名誉書記 思案外史」

として、石橋思案の名を確認することができる。編集に携わるのが後年のことであったとしても、創刊当時の『文芸倶楽部』とかなり深い関わりがあったと想像される。

石橋が編集を務めることになったとされる一九〇二年（明治三十五年）から、石橋の『文芸倶楽部』での活動が活発化する。石橋は「懸賞小説」と称して、読者から小説を募集し、選評を行っている。『文芸倶楽部』誌上で初めて小説の募集・掲載が行われたのは一八九八年（明治三十一年）の「あけの星」という短編小説である。尾崎紅葉と幸田露伴の連名による合選は、一八九七年（明治三十年）には連載を開始した『金色夜叉』の影響もあり、読者の創作意欲をかきたてたものであったことが想像される。

しかし、その懸賞小説も翌年の年末には企画自体が終了してしまう。それを復活させたのが編集を務めることになった、石橋思案である。一九〇三年（明治三十六年）三月には再び懸賞小説の掲載を行い、またそれに対する選評結果を石橋自らの名前で行い始めたのだ。これは後に新作落語の募集を行うきっかけにもなる、募集企画だったといえよう。

石橋思案にとっての滑稽とは

前項でも述べたが、石橋思案のもう一つの側面に、「滑稽文學」者としてもある。近世において滑稽文学者として名高い式亭三馬が、落語家である三笑亭可楽と交流関係にあったことは『浮世風呂』を始めとする著作でも知られている。明治期において滑稽文学の末流にいた石橋思案が「滑稽」をどのように認識した上で、『文芸倶楽部』において新作落語台本の募集を行ったのか、本稿において検証していきたい。

彼の「滑稽」に対するイメージを表すものがある。それは一八八八年（明

治三十一年）『文芸倶楽部』第四卷第二編から始まる「通俗 滑稽學講義」という三つの小論文である。これらの内容は石橋の文学に対しての考えが現れたものである。だが、その底流にあるのは、「滑稽」を至上命題とする石橋ならではの考え方だ。同年第第二編において当時の文学が「悲哀の部分だけ發達」している現状を危ぶむことで始まっている。

抑も健全なる文學の發達を望むには、悲哀の方面と、滑稽の方面とが併行して行かなければなりません。悲哀の部分だけ發達して行けば、其國の文學が沈むで行くし。また滑稽の部分だけ進むで行けば、その國の文學が躍つてゆくから。両々相俟つて同一の程度に發達して行かなければ、其時代の文學は、未だ完全の域に達したと言われまいかと、私は信じて居るのでございます。

一八八五年（明治十八年）に坪内逍遙が『小説神髓』を発表したことを考えれば、石橋の考えは、滑稽に基づく独特な文学觀が窺え興味深い。第一回目の小論文では右の主張を除けば、『浮世風呂』のように会話の文体で、様々な人々による当時の文学への不満をコラージュするものとなっている。同年第四卷第五編において、「(二) 如何にせば高尚の域に進むべきかの事」という副題で、第七編においては「(三) 三馬一九比較の事」という副題で、小論文が再び發表される。

趣旨としては(二)で、今後「滑稽」が高尚なものとして評価されるためには不自然な趣向ではなく、自然に近い趣向を目指すべきだというものだ。(三)ではその例として、当時滑稽文学者の代名詞であった、十返舎一九と式亭三馬の比較を行っている。その中で一九の作品を「根本的無理な趣向で充満して居る、否、強ひて讀者を笑はせんとした」ものであると、痛烈に批

判している。一方の三馬の作品を「自然の滑稽を描出して」いると賞賛している。

これだけでは石橋の「滑稽」に対するイメージが不十分になってしまうので、より細かく（三）の文章を見ていきたい。一九と三馬の比較の後に、論趣は当時の新聞に掲載される小説に及ぶ。

文界の濁流滔々として底止する處を知らず、新聞紙上の小説は、皆悉く是等講談師落語家の手に奪ひさられんとする。

前章で暉峻の考えとして記したが、石橋にとって「大衆文学不在の明治時代における、大衆文学の役割」を落語・講談が果たしている現状に不満を持っていたことがうかがえる。三遊亭円朝の落語が石橋にとってどのような写ったかはわかりかねるが、彼が標榜する「滑稽」は「高尚」なものであり「自然」なものでなければならなかった。そうした「滑稽」を体现しているのが、三馬の作品なのであり、読者と作者がそれを目指さなければいけないと石橋は訴える。では、後年新作落語の募集を行う石橋にとって、落語のどのような部分が至らないところだったのであろうか。

然るに詐欺師の玄関宜しくとも謂うべきか可厭に冗長い冒頭には呆れる。是等の下らない講談落語を、加も面白がつて読むのは、全く其時々挿まれて居る、軽口駄洒落が與つて、大に力ありと言はねばならぬ。

石橋にとって落語というものは、それ自体が「滑稽」なのではなく、挿入されている「軽口駄洒落」によって読者を引きつけるものでしかないのだ。またそれが石橋の否定した「強ひて読者を笑はせんとした」不自然なものな

のだと考えられる。以上のように江戸時代の文学に理解があつた石橋思案が、落語のことを嫌悪していた訳ではない。一八九九年（明治三十二年）に、落語について書かれた江戸時代の書物をまとめた『落語全集』を博文館から出版している。

前章で取り上げた「落語の改良」で石橋が強調していた「眞[△]の滑稽^{△△△}」は「通俗滑稽學講義」で主張した「滑稽」のイメージを底流にしていることは間違いないだろう。

海賀変哲と『落語の落』

新作落語の選評に関わつたもう一人の重要な人物が海賀変哲である。しかし、彼は石橋とは異なり、硯友社には所属していなかった。一九一四年（大正三年）十月十五日発行の『文芸倶楽部』第二十卷第十四号において、「記者になるまで」と題した海賀の半生を記した文章がある。それによると、『文芸倶楽部』入社以前は役所勤務の中で出した投稿小説が認められたのを機に、小説家として活躍していた。一九〇六年（明治三十九年）七月に『文芸倶楽部』を訪問した海賀に、巖谷小波が少女雑誌を新規に発行するので編集として働かないかとの口利きがなされ、同年八月一日から海賀が正式に博文館に入社した。また、その少女雑誌が『少女世界』とされるもので、九月に発行される。博文館に入社が決まった海賀は同年十一月に『文芸倶楽部』に席を移すことになる。

「記者になるまで」によると、「（明治三十五年）この十二月、三宅青軒氏文芸倶楽部を辞して、雑誌『文華』といふのを發行し、その主幹と成つたが、三號程で廃刊した、三宅氏の後任として讀賣新聞社から、石橋思案氏が來つて文芸の主筆となり、引續いて今日に至る、但しその頃まで僕は石橋氏とは

一面識も無かった。」とされている。後年新作落語の募集を牽引していく両者の交流は、それ以前にはなかったとみて良いだろう。

前項でも記したが、石橋思案が「通俗 滑稽學講義」や『落語全集』といった、落語や「滑稽」に対する歴史的裏付けを行う人間であった。対して、海賀は実地で落語を鑑賞することで、落語とは何かを検証する人間であった。一九一一年（明治四十四年）七月十五日の『文芸倶楽部』第十七巻第十号で連載が始まる「落語の落」がそれだ。『文芸倶楽部』にて掲載された「落語の落」とその他笑話に関するものを集めたものが一九一五年（大正四年）に三芳屋書店から『落語の落』として、書籍化される。現在では平凡社・東洋文庫から『新編 落語の落』として復刻されており、当時の落語の様子などが窺える資料となっている。

『落語の落』冒頭に、海賀が『文芸倶楽部』誌上で「落語の落」を執筆した経緯が記されているので左記に挙げる。

「落」が落語の必要条件である事は言うまでもない。しかもその落語の数は五百種以上に達している。その悉くを暗じて居る者が有るだろうか。堂々たる一流の落語家ですらも、ちと覚束なかろうと思われる。（中略）併しその筋道を委しく吞込んで居らずとも、せめて「落」だけなりと覚えて居たらば、少なからず利益になる事もあるうと、斯う考えて、僕が「落語の落」に筆を執ったのは今から四年程前で「文芸倶楽部」の増刊に掲げたのであった。夫から引続き増刊毎に執筆して、爰に其数三百数十種に上った。

それまで、落語を全網羅的にまとめるという試みは存在し得なかった。「落」だけとはいえ、その数は膨大なものになっている。

内容については、落語の最後につく落までのあらすじに、それぞれのストーリーや落の良し悪しを書き、更にそれぞれの落語は、当時の誰その落語家のものが良かったということが記されている。次項において、その内容を細かく見ていきたい。

『落語の落』に隠された海賀の落語に対する考え方

『落語の落』は二つの点で、特徴的な記述がされている。一つは、短いながらもそれぞれの落語に海賀の評価が下されていることである。二つ目に、その落語を口演する際に、当時の誰その落語が素晴らしかったかの感想が記されていることである。

一つ目の点について、評価の部分だけいくつか例を提示したい。

ふつくらした宜い話で、落もまた綺麗である。（「盃の殿様」）

「実はまだ承わらずに参ってござる」という落で、話しも面白く出来て居れば落も相応に振って居るが、下がかって居るので、野卑の感じを起すは是非もない。（「粗忽の使者」）

「三枚起請」と同じ様なものだが、筋はの方が宜い様だ。但し落語としての可笑味は彼の方にある。（「文違い」）

余り突込んで話すと忌諱に触れる点があるので、高座では演^やらぬ。（「氏子中」）

左して可笑味はないが、筋は立って居る。（「地味屋」）

このような短評が、『落語の落』に掲載されているほとんどの落語に対して下されている。右記の評価基準からわかるように『落語の落』での海賀の短評は極めて主観的で、使われている言葉自体も「ふつくら」や「野卑」といったように単純なものしかない。

ここで重要なことは、海賀の落語観が独断的であると断言することではない。むしろ海賀が『落語の落』を執筆した当時において、まだ落語を語る言葉自体が稚拙で合ったのではないかと仮説をたてることである。「(三) 新作落語の選評結果」で『文芸倶楽部』に投稿されてきた新作落語の短評を見ていくが、いずれも石橋・海賀が悪戦苦闘しながら評価していく姿がうかがえる。

次に二つ目の点として挙げた、それぞれの落語は誰の口演が良かったか記されていることを検証していきたい。

これはあまり女房にこうこうしたから重石に成ったという落であるが、全体の話しに一向興味が無く、殊に佐用姫の落を附けよう為めに、狭手彦の縁語を採ってはで彦としたり、家号を松浦屋と為たのなど、いかにも故とらしく、円蔵がいかに快弁を振るうともこればかりは更に面白く聞かれない。（「はで彦」）

只この話しの面白味は、気の弱い屑屋が酒を飲ませられて、段々酔が廻り、恐ろしく気が強く成って、死人を担ぎ出す処に有るので小さん独特の妙を發揮したものである。落は拙だが、全体は面白い。（「らくだ」）

故円喬が十八番もので、雪を口に含んでは、題目を唱えながら遡るところから、鰯沢の物凄い流れの有様を話すあたり、全く息も吐けぬ面白さだが、落^{さげ}に至って拍子が抜ける。（「鰯沢」）

話しの筋といつては、甚だつまらぬものであるが、飄逸な故人馬楽が之を話すとまた別種の趣があつた。岩に熊の二人が寺で散々飲食するところや、金兵衛の家へ来て、「これが仏壇か、イヤ中には梅干や蓮^{はす}根の煮たのが入って居る」もしもし和尚さん夫は蠅^{はいちよう}帳です」のあたり思わず噴^{ふきだ}飯させた。（「万金丹」）

このように、落語の内容だけでなく落語家についても書かれる際、海賀自身の実験に基づいた評価が下されている。「せめて「落」だけなりと覚えて居たらば」という姿勢で書かれた『落語の落』であるが、このように体験に基づく記述までされてしまうと、落語家というバイアスも入ってしまい、落だけをとり扱った書物として問題が生じてしまうと考えるのが普通であろう。しかし、この記述方法こそが海賀の落語に対する考え方が現れているのではないだろうか。つまり、落語というものは落語家によって口演されることで、初めて落語たり得るという考え方だ。

速記術と新興文芸メディアの発達によって、読むことで落語は疑似体験できるようになった。その考え方にに基づき、読む落語に滑稽という概念を持ち込もうと試みたのが石橋思案という選評者である。対して、従来のように落語は寄席や落語会で体験するものであると考えていた選評者が海賀変哲であった。二人の落語に対するスタンスは、二人の著述を検証していくことで現れてきたと言えよう。

この二名によって、選評が行われたわけだが、連名によって選評結果が公

表されたものが四つある。次項からそれらを具体的に見ていきたい。

(三) 新作落語の選評結果

選評結果の概略

左にあげる新作落語に対する落語評はいずれも一九〇九年（明治四十二年）に発表されたものだ。これは一九〇五年（明治三十八年）に初めて『文芸倶楽部』誌上で、「新作落語の募集」が開始されて四年後のことであった。それまでも投稿されてくる新作落語に対して、短評が下されることはあったが、このようにまとまった形で論じられてくることはなかった。その後もこの様なかたちで短評が行われるかと思われたが、残念ながらこの年を最後に、新作落語に対しての総論的な短評は行われなかった。

一月一日『文芸倶楽部』第十五巻第一号において「募集落語について」という記事が掲載される。これは石橋・海賀の連名によって、一九〇八年（明治四十一年）十二月十日までに投稿されてきた新作落語について短評を加えたものだ。一九〇五年（明治三十八年）九月一日以来、はじめは不定期ながらも新作落語の募集を行っていたが、本文記事によれば当時毎月二十篇もの作品が投稿されるに至っていたことがわかる。

三月一日『文芸倶楽部』第十五巻第四号において「募集落語総評」は先述の「募集落語について」と同様、石橋・海賀の連名で、作品の簡単なあらすじと短評が記されている。「去月五日の締切迄に集った」作品、すなわち一九〇九年（明治四十二年）二月五日までに集まった作品十七作品のうち、五作品について論じられている。

六月一日『文芸倶楽部』第一五巻第八号において「総評」が掲載されている。記事によれば、「前々回」すなわち第十五巻第六号で余白がなかったため

に、本号で短評をまとめて発表している。同じく投稿されてきている新作落語の数が掲載されており三十九件となっている。しかし、いつまでに投稿されてきた新作落語であるか表記されていない。

九月一日第十五卷第十二号において「略評」が掲載される。前々号すなわち第十五卷第十号で応募された新作落語の中でも、四つの新作落語について短評が行われている。しかし、この「略評」においては投稿されてきた新作落語の数はわからない。

以上が四つの選評結果の概要である。『文芸倶楽部』第十五卷第一号の記事を信頼するならば、毎月二十編程度の新作落語が投稿されていたと想像される。第十五卷第八号の記事も、いつまでに投稿されたものか記述がないことから、選評結果が掲載されなかった一回分余計に多く含まれていたのではないかと推察される。

選評結果に見る新作落語のコード

これらの選評結果には石橋・海賀の考え方が反映されている。これらは「新作落語はかくあるべきだ」というコードが働いている。以下で詳細をみていきたい。

まず一つ目に、落語家に品位を求めるという考え方だ。これは『落語の落』の内容で触れたが、「下がかって」いることや、「忌諱に触れる」ことに海賀は難色を示した。『落語の落』における顕著な例として、「牛ほめ」が挙げられる。

穴が隠れて第一屁の用心が宜いとは、野卑極まる落である。当今研究会あたりでこの落を言わなくなったのは至当であろう。

妥当な新作落語については「落語研究会」で口演する機会があると宣誓した『文芸倶楽部』であるが、投稿されてくる新作落語にもこの考え方が求められた。「募集落語について」で短評が下された翠雨の「地獄買」がそれにあたる。

會話かいわも可なり達者で、全體ぜんたいにたるみの無い作であるが、願はくは今少し綺麗な材料にして欲しい。洋妓が引附ひきつけの時、キツスをやるなどは、高座いたにかけて演ずる場合には考へものだと思う

「キツス」が現在とは異なる理解のされ方がされていたにしても、あくまでも落語家が口演することを前提としている考え方、「綺麗な材料にして欲しい」という記述方法、いずれにも海賀らしさが現れている。

いかにも可笑をかしく出来できて居ゐるが、種たねが上品じやうひんでない。と言いつて女郎買話ぢよろかひばなし其物が下品げひんといふのではない。話はなしの筋すぢから落さげまでが下掛しもがつて居ゐるのが面白おもしろくないといふのである（「総評」「女郎買の失敗」）

この例になると、『落語の落』それ自体にも出てきかねない内容である。二つ目に不自然な作りではあつてはいけないという考え方だ。これは石橋の「滑稽學講義」で現れている「強ひて讀者を笑はせ」ることを嫌悪し、「自然の滑稽を描出」すべきだという考え方だ。「募集落語総評」において、三浦北廬の「雛上戸」に短評が下されている。

例に依よつて輕妙けいめうに出来できては居ゐるが、餘り話はなしを拵こしらへ過すぎて居ゐる、聯絡れんらくの

無いところへ、無理に機會を附けて人物を働らかせて、落をつける、此缺點は北廬子ばかりで無い、應募諸子に慨して然ういふ傾がある、注意すべき事と思ふ。

あらずしが記されていないので詳細はわかりかねるが、三浦北廬だけでなく多くの投稿者に働きかけている点で、新作落語募集におけるコードと言つても良いだろう。

最後に、石橋・海賀の両名に共通した新作落語足るべきコードを挙げる。それは新しさである。当たり前のことであるが、両名は新作落語に今までの落語にない物を求めていた。それは石橋の「落語の改良」でも分かる、海賀の『落語の落』『新作落語の落』でも「在来の古い落語の中の、くだらぬもの比べて、遙かに優つて居るものがある。」と記しているように、新作落語の新しさには期待を寄せている。しかし、投稿されてくる新作落語は既にある落語の焼き回しが多くあると見えて、度々苦言を呈している。

會話も輕妙である、無駄な文句もない、一氣に通讀させる技倆はありながら、奇抜な、斬新な所のないのが惜しい（「募集落語について」「七夜」

これは命題の如く物知先生が八五郎に對つて、こじつけ放題こじつけて言ひ聞かせるといふ話、彼の木火土金水などと同じ畑に生えたものだが、肥料が足らぬか實りが悪るい（「募集落語総評」「物知り」）

これを讀むと英雄の成田小僧を思ひ出す、兎に角新しくないのが疵だ

（「募集落語総評」「按摩小僧」）

軽妙けいめうな作さくで落さげにも無理むりは無いなが、男おとこの恋病こひやみといふ着想ちやくそうが既にすで今日の物ものでなからう（「総評」「ラブシツク」）

このように新作落語には、当たり前のことであるが新しさが常に求められていた。

以上で挙げた三点以外にも選評結果を見ると、「軽妙」「筋が通っている」といったことを評価対象としていたことがわかる。しかし、ここで挙げた三つのコードは必要最低限のものであったようだ。

次章においてはもっとも掲載回数が多かった新作落語投稿者である、みよしの家に焦点を当てる。みよしの家は掲載回数五回と、『文芸倶楽部』の新作落語募集において最も多く採用されている。だが一方でみよしの家の新作落語は「落語研究会」において、口演されることはなかった。そうした意味でも『文芸倶楽部』における新作落語募集の実情を知る、最適な調査対象であろう。

また、みよしの家と演芸評論家である岡鬼太郎の新作落語を比較することで、『文芸倶楽部』誌上における新作落語の募集における問題点を考えていきたい。

第三章 新作落語募集の問題点

（一） みよしの家く新作落語投稿者のモデル

みよしの家という人物

『文芸倶楽部』誌上において、新作落語投稿者の中で、最も多く掲載されたのが、みよしの家という人物である。本名を高際俊彌と言い、『文芸倶楽部』誌面における表記によれば、東京市本所区に住まいする人物であったようだ。

みよしの家という人物は、他の新作落語投稿者とは異なり、『文芸倶楽部』に新作落語以外の原稿が掲載されることがなかった。そう言った意味でも新作落語投稿者として純粋な存在であり、またどのような新作落語を『文芸倶楽部』が評価していたのか把握するのに役立つモデルだと考えられる。以下で、みよしの家の作品と短評を検証していきたい。

初掲載作品『まぐれ当』

彼が投稿した新作落語で、『文芸倶楽部』に掲載されたものは全部で五本と、一九〇五年（明治三十八年）九月一日の応募開始以来、最も掲載回数が多い人物となっている。みよしの家の新作落語が初めて掲載されたのが、「まぐれ当」というものである。これは一九〇七年（明治四十年）三月一日の『文芸倶楽部』第十三巻第四号で掲載されたものにあたり、『文芸倶楽部』が新作落語の募集を初めて間もないころのものである。

一九〇五年（明治三十八年）の新作落語募集から、みよしの家の出現までの間に、〈新作〉・〈當選〉といった言葉がついた落語は五作品ある。

明治三十八年十月十五日 琴詩楼 「応募当選 新作落語 雨乞ひ」

同年十一月一日 語吝 「落語 新作 意地競」

明治四十年年一月一日 大橋亭わたる 「落語 新作落語当選 化物屋

敷」

同年一月十五日 さうかく 「ざつろく 新作落語 信心」

同年二月一日 日河岸聳溪 「当選落語 鼠舞」

右記の中で、読者から投稿された新作落語は「信心」を除いた四作品であ

る。「意地競」については、『落語の落』で「『文芸倶楽部』の」募集に応じた新作である」とされている。「化物屋敷」で初めて、「第二等」であることを表記し選評結果も公表した。これは同じく「鼠舞」、「まぐれ当」でも続けられていく。

さうかくは演芸評論家の岡鬼太郎である。同じく岡の作品が、「双角」、「魔王」のペンネームで、掲載されることになっていくが、いずれも他の投稿者とは区別して「第〇等」などは表記されなかった。

「まぐれ当」は『落語の落』で、あらすじが記され短評が下されている作品のひとつである。

新しくはないが面白い趣向である。会話もみよしの家子一流の筆法で、かなり軽妙に出来て居る。この作などは余り手を入れずとも、高座いたに掛けられようと思う。

また、同時期に掲載された「鼠舞」についても、同じく『落語の落』において、あらすじと短評が記されている。「第三等」を与えられた新作落語である。

この作は、古い落語の「風呂敷」を材料たねとした事は明かである。元来「風呂敷」という話が、至って野卑で、しかも浅薄なものであるから、その話を土台としたこの作の振わぬのもまた是非なき事であろう。

あらすじははぶくが、海賀は「風呂敷」同様「鼠舞」という新作落語が、間男に関する不貞不義を扱った落語であることに明らかな嫌悪感を示している。一方の『まぐれ当』は泥棒に関する落語であり、前半部分が現行の「や

かん泥」「出来心」のように間違った家に泥棒に行くエピソードがくすぐりとなり、二人の泥棒があべこべに相手の家に入ったことが落語の落ちとなっている。いずれの作品においても前章でみてきた「品位をもとめる」、「新しさ」といった新作落語としての選評コードを確認することが出来る。

「美顔術」

「まぐれ当」と同巻で「第二等」を受賞したのが、左崎清波女の「當世下女」である。この作品も、『落語の落』で取り上げられているが、「左したる趣向でもない。只我儘な下女が細君に対つて、用事など其方のけにして、芝居の話や何かするあたりが、聞き処と言わば言われよう。」と評している。

「まぐれ当」が掲載された次号、再びみよしの家の新作落語「美顔術」が掲載されている。『文芸倶楽部』においては、第十三卷第三号（明治四十年二月一日）で「新家庭 流行の美顔術と髪飾品」や第十五卷第十二号（明治四十二年九月一日）で「美顔タオル」の広告が掲載され、また『読売新聞』の一八九六年（明治二十九年）四月二十日付の記事「化粧面 米ニューヨークで夜睡眠中に使用も美顔術の一種か」や、一九〇七年（明治四十年）二月二十五日「美顔術の昨今 施術者庄司直子は来月から発毛術を行う由」などで見られるように、「美顔」という言葉が当時の美容に関してキーワードとして扱われていたことがわかる。

「美顔術」については掲載された『文芸倶楽部』誌上において短評が掲載されているので、ここで記す。

今回の應募数は實に七十餘篇にも達したのであるが、落語は小説よりも六つかしいと見えて、是はと思ふ佳作に接しなかつたの遺憾である、當選の

みよしのや君くんは、前回ぜんくわいにも二等とうを取った人で、同じ人の屢々しばしば當選たうせんするのは面白くない事ことであるが、是これも致方いたしかたがない、尤もつとも今回の前回の比くらべて餘程劣よほどおとつて居るやうだ、猶なお一層そう奮發ふんぱつして貰もらひたい、落選中の佳作かさくとも見るべきものは、洋々庵子の「ハイカラ好み」なる一子の「好た同士」等とうである。

応募総数が七十件にも及んでいることに注目したい。先述の「選評結果の概略」において一九〇九年（明治四十二年）の時点ではひと月に送られてくる新作落語の数は二十件で落ち着いており、『文芸倶楽部』で新作落語の募集を開始した当初においては、かなりの数の読者が新作落語興味を示していたことがわかる。

だが同号において「落語は小説よりも六つかしいと見えて」と選者が評しているように、七十件にも及ぶ新作落語も玉石混交だったのだと推察される。その中で、二巻続けて掲載されることになったみよしの家の「美顔術」という作品を見ていきたい。『落語の落』のあらすじと短評を掲載する。

金太という男が、理髪店に行つて、流行の美顔術を施してもらつた。さすがに其の道だけあつて、自分でさえ見違える様な顔に成つたので、大恭悦で外へ出て、友達に語をかけるが、いずれも顔違いがして居るので、最初は不審に思つてとんちんかんな挨拶をする。夫でも結局は当人と判つて驚いて別れる。金太はやがて家へ歸つて来たが、女房は自分亭主とは気が付かない。慇懃に応答する。金太はつかつか上がりこんで、腹が空つたら、飯を食わせろなどいう。女房は気味悪がつて、追い返そうとする。イヤおれはお前の亭主だよ、と言っても更に真実としない。とど女房は大声を揚げる。近所の女房達もやつて来る、家主も来る。で、双方の言う所を

聞いたが、いずれも金太の顔が变つて居るので信用しない。で金太は脇にあったバケツの水でザブザブ顔を洗うと、元の通りの金太に成った。女房は呆氣に取られて、「マー金さんだよ、面目ないね。顔が变つて居たものだから、いろいろな悪口を言つて済まなかったね、腹も立つだろうが堪忍してください」と謝る。家主も共々口を添えたが、「ウンニヤ勘弁ならねえ。よくも亭主に恥をかかせた。亭主の面に泥を塗りやアがつたな、出て行け」という。「何だかねえ儂が泥を塗ったなんて、どんなにか悪い事でもした様にさ」「泥を塗ったに違いなかう、それとも何か言い分があるか」「アラ嫌だよ、お前さんが白粉を塗ったのじゃないか」という落。込み入った筋でもなく、只美顔術で顔違いがした上の間違い丈けの事であるが、対話はよく出来て居る。但し高座にかけようとするには、今少し趣向を加えずばなるまい。

先述したとおり、当時の雑誌や新聞から「美顔術」という言葉は、美容をテーマに流行していたことがわかる。一九〇八年（明治四十一年）の『読売新聞』に「現代の男女は如何に美顔術に苦心しつつあるか」という記事がある。これは、当時社交界に進出しようと試みる人々が美顔術に注目しているために、「二三年前に比べて得意も多くなれば技術もめつきり進歩した」と記されている。また「大抵は理髪店の副業である」とも記されているように、「美顔術」自体が、時勢に鑑みた新作落語であることがわかる。前章で扱った「新しさ」の選評コードにあたる。いわゆる名士とされている人々が利用する美顔術を一般人である金太が、誰にも顔を判別されない筋は、面白みを感じさせるものであるが、選者はそれよりも、みよしの家の「対話」の妙について評価を下している。

みよしの家の後期作品群（「島料理」、「食ひ違ひ」、「俄盲」）

みよしの家が再び掲載されるのは、少し時間があいた一九〇八年（明治四十一年）七月一日、『文芸倶楽部』第十四卷第九号のことになる。「島料理」と題された作品は店内にお客に似せた人形があり、品書きが洒落で書かれている料理屋に真平と甚助の二人が遊びに行くというあらすじである。『文芸倶楽部』誌上においては、作品自体は「第二等」となっており、「島料理」のあとに選評が掲載されている。

筆の軽き事はこの作者の特色なるべく、
趣向なり、惜しいかな下げを今少し振はせたかりし
際物にはあらざれども面白き

一九一〇年（明治四十三年）六月一日『文芸倶楽部』第十六卷第八号、二年振りにみよしのやの新作落語が掲載されている。「食ひ違ひ」という新作落語は泥棒についての落語で、現在「芋俵」や「釜泥」と呼ばれている、泥棒を扱った落語と似通っている。二人の男が、質屋に忍び込み、質に取られたものを取り返そうという筋である。「芋俵」のように、つづらの中に忍び込んで、つづらを質屋の中に運び込まれたところで、盗みを働こうとするのだが、誤って自分たちの家に運ばれてしまうことで、面白みが出ている。

『落語の落』では、「この落は「釜どろ」あたりから思い付いたのではあるまいか、彼と比較して評するのは、ちと酷ではあるが、「釜どろ」の簡潔なるには及ばぬが、葛籠の趣向から、自分の家へあべこべに持ち込まれるあたり捨て難いところもある」と評されており、『文芸倶楽部』では「第二等」の作品となっている。

同じく二年ほど経った、大正二年二月一日『文芸倶楽部』において、みよ

しの家の新作落語「俄盲」が掲載される。これも同じく『落語の落』において、短評が掲載されているのだが、海賀が評するように「落語には随分不自然なものもあるが、これは（「俄盲」という落語が）また不自然過ぎ」るものとなっており、「第三等」になっている。

以上でみよしの家の全作品を見てきたが、前章で確認してきた選評コードに抵触している例が度々見受けられる。だが、それを補うにあまりあるみよしの家の「軽妙さ」が『文芸倶楽部』で最多掲載回数となったのであろう。

（二） 岡鬼太郎く新作落語作家

岡鬼太郎の活躍

みよしの家が一般的な投稿者のモデル像をなしていたことは、前項までで記してきた。

一方で、みよしの家とは異なり、文筆業を生業として、新作落語を作っていた岡鬼太郎の存在がある。岡は当時劇評家として、既に著名な人物となっていた。『文芸倶楽部』誌上においても、「演芸当座帳」というコラムの中で、歌舞伎を始め文楽や寄席の演芸について多くの劇評を残している。また、劇評だけでなく創作活動も活発に行っており、彼の作品は花柳小説や歌舞伎の戯曲にまで及んでいた。

この項では岡の『文芸倶楽部』における新作落語創作家としての活躍に注目して生き、またそれが読者にどのような影響力を持っていたのかを確認していきたい。

岡の滑稽文をまとめた書籍に『江戸紫』というものがある。一九一二年（明治四十五年）五月出版されたこの書物は、『文芸倶楽部』誌上で掲載された岡の新作落語数編も掲載されているものだ。『江戸紫』に掲載されている新作落

語は左記のものである。

- ・「意地競」
- ・「信心」
- ・「女福引」
- ・「酒専売」
- ・「包み娘」
- ・「落ち天」

同じく、『文芸倶楽部』にて新作落語の募集開始時期に、掲載された新作落語を挙げる。

- ・「包み娘」 さる松 （明治三十八年九月一日）
- ・「雨乞ひ」 琴詩楼 （同年十月十五日）
- ・「意地競」 語客 （同年十一月一日）
- ・「化物屋敷」 大橋亭わたる （明治四十年一月一日）
- ・「信心」 さうかく （明治四十年一月十五日）

「包み娘」が掲載された『文芸倶楽部』第十一卷第十二号においては、石橋と思しき人物によって、作品の紹介がなされている。それは『落語の改良』という檄文に同調を示した、さる松という読者が「新作して寄稿」したのが「包み娘」という新作落語であるというものだ。あたかも、善意の一読者が石橋の考えに同調し、新作落語を投稿してきたかのようなスタートは戦略的なものだったといえる。

新作落語を募集する企画が、成功するか否かの判別のつかない時期に、落

語にも造詣が深い岡の新作落語を採用したことは先見の明があったといえよう。事実「意地競」という演目は人間国宝となった五代目柳家小さんも得意としていた。現在でも口演に耐える新作落語として、完成度の高さがうかがえる。

岡鬼太郎の新作落語と『文芸倶楽部』における扱い

前述したとおり、岡は新作落語を紙面に掲載する際、偽名を用いた。「さる松」という名前も、現在では名跡とされている三遊亭円生という高座名が、もとは「山遊亭猿松」の同音異字であったことに由来すると考えられる。また、「語吝」という名前は、明治期に落語家が寄席へ出演する際、出演交渉などを行う職業を指して、五厘と呼んでいたことに端を発していると考えられる。以上のようなペンネームは、落語に造詣の深い読者にとって、落語に携わる人物が投稿してきたのではないかと想像させるに足るものであった。

岡は双角や魔翁といったペンネームでも、新作落語を掲載し演芸に関するコラムを執筆していた。

岡の新作落語を掲載する際には、他の新作落語とは異なる扱われ方がなされていた。まず、先述のとおり、新作落語を紙面に掲載する際に、岡であることがわからないようにペンネームを多用した。

また、一般読者からの新作落語については、紙面で投稿者の住所と本名を表記していたが、岡の新作落語が掲載される際には、そういった情報は提示されることがなかった。石橋や『文芸倶楽部』入社後の者たちにとってこの処遇は当たり前のものであった。『文芸倶楽部』誌上において「演芸当座帳」といったコラムを執筆していたことから、『文芸倶楽部』関係者として、新作落語を創作していたと考えられる。

第三に、読者からの新作落語に対しては、第何等などの作品に対する評価と寸評が下されているが、岡の新作落語に対しては、「女福引」の第二等を除き、すべてに評価は下されていない。後述するが、これは岡の新作落語があたかも読者からの投稿であるかのように装う必要があったことを想起させる。

岡の『文芸倶楽部』における読者の扇動

『文芸倶楽部』に読者が新作落語を投稿するメリットは、小説や随筆とは異なる、落語という文芸ジャンルを通して、創作物を発表する機会が作られたことであり、またそれに対する評価として、賞金が支払われることであろう。また、読者が創作した新作落語が落語家によって口演される可能性があることも、読者の創作意欲を駆り立てるものがあつたとうかがえる。

「落語研究会」において、非落語家によって創作された新作落語が口演されたことは、石橋の「落語の改良」や、山本進氏の研究(『図説 落語の歴史』)でわかっている。山本の調査によると、「落語研究会」第八回で「包み娘」、第九回で「意地競べ」が口演されたことがわかっている。既に記しているが、いずれの新作落語も岡の創作した新作落語である。

この事象をどのように解釈するのが妥当であるか。

竹下英一郎の『岡鬼太郎伝』に、岡と「落語研究会」の繋がりについて触れた文章がある。それによれば「明治三十八年(一九〇五年)速記界の立者今村次郎、相撲寄席等の世界の権威石谷華堤と計り、先生は「自ら憎まれ役の小言係」をうけたまはつて、落語研究会を起し」たというものだ。この文章に従うならば岡は「落語研究会」の発起人の一人であつたというのだ。

第一章で取り上げた「割看板」では岡自身が発起人であることは記されていないかった。何故記されていないのかを考えるには、これだけの情報で

は少なすぎる。しかし、岡が「落語研究会」の発起人であったことが事実であるとすれば、彼の新作落語が口演される妥当性が生じる。また「落語研究会」の発起人である岡が、自作の新作落語を『文芸倶楽部』誌面に掲載し、新作落語募集の企画を行うきっかけ作りをしたとするならば、その根底には「落語研究会」で口演されるべき新作落語のモデルを提示することが理由にあったと考えられる。「落語研究会」と『文芸倶楽部』における新作落語募集のきっかけを作った人物が岡鬼太郎であると考えるのが、以上の事象を解釈するのに妥当であろう。

「落語の改良」において、石橋は「聴き手」にも問題があると考えていた。読者にとっては「落語改良」の言説は眼中に無かったかも知れない。新作落語の出来によっては、賞金や誌面での掲載、あわよくば「落語研究会」で口演される可能性も生じる。その付加価値だけでも新作落語を創作させる魅力があった。だが、毎号二十作品もの新作落語が投稿されていたことを考えれば、新作落語を創作する読者たちは石橋が求めていた「聴き手」が定着し始めたと言えよう。

(三) 「懸賞小説の時代」からみる新作落語募集の問題点 「懸賞小説の時代」からみる新作落語の募集

最後に、「落語研究会」に出演する落語家に新作落語を提供する形で『文芸倶楽部』は後援するに至ったわけだが、ここで今一度新作落語の募集を懸賞文学という視点で、考えていきたい。

近代日本の文学史は、どうしても古典に位置づけられた作家たちの「作品」や文学理論を中心に叙述されることになる。だが、理論的な著作がい

くら書かれたとしても、また新鮮な文体と内容をあわせもった小説が書物の形をとって数篇登場したとしても、それだけでは「文学」の定着につながるわけではない。より多くの人々のあいだで、「文学」がテキストというさまざまな具体的な実体となって流通しなければならなかった。そして「文学」というよそ者の観念を自分のものにしていくプロセスが不可欠だった。

「文学の読者」が増殖し、そのなかから「文学の作者」が大量に再生産されるようになれば、「文学」は社会や文化のなかで一定の領域を確保できなかったはずである。（紅野謙介『投機としての文学』「懸賞小説の時代」）

以上のように、近代文学において欧米以上に発達した懸賞小説という文学ジャンルについて紅野謙介は語っている。それまでの日本になかった「文学」を定着させるために、新聞や雑誌といったメディアは、不特定多数の読者に対し創作させる、懸賞小説というプロセスが用いられた。それは新興文芸メディアだけでなく、投稿する読者にとっても一大イベントであったといえよう。

それまで落語や講談といった話芸は、東京や京阪地域のような都市部において寄席というメディアを通してしか体験することができなかった。しかし、速記術の輸入によって落語は誌面を通じて疑似体験が可能になった。更に速記術が一般的になることで、落語・講談の速記専門雑誌『百花園』の誕生へとつながる。そして、独自の販売網を持つ『文芸倶楽部』でも落語・講談が扱われることで、落語は日本全国どこでも疑似体験が可能になった。都市部の寄席でしか体験できないとは言え、ローカルな話芸であった落語は新興文芸メディアの発達で一つの文学形態として受容されていく。

落語が一つの文学形態であるという新しい認識。これは大衆文学前史にお

いて、多くの読者を獲得し、『文芸倶楽部』の新作落語募集によって多くの新作落語作者を生み出す。そのプロセスは落語が文学形態であるという認識を、より強固なものにしていく。

新作落語の募集における問題点

読者から新作落語を募集するという試みに、問題点は無かったのか。紅野が『投機としての文学』で投稿者の性質を指摘している。

応募者は同時代の小説モードに対して鋭敏な読者のなかからあらわれる。模倣や本歌取りが繰り返されたことは言うまでもない

全国に読者を抱えている『文芸倶楽部』であったが、新作落語の投稿者は全国に及んでいなかった。新作落語の募集開始から、海賀変哲の『落語の落』執筆までの間に、投稿者十五名の住所がわかっているが、甲府や金沢といった地方の読者からの投稿は二つしかなかった。他はいずれも東京や京阪地域の都市部の読者からの投稿であった。新作落語募集においても紅野の指摘があてはまる。先述のみよしの家の選評結果にもあるが、従来ある落語の趣向を転用したと評されるような新作落語が目立っている。また選評結果でたびたび見受けられる「聞き巧者」という言葉からも、投稿者は寄席で落語を享受しているものがほとんどであったことがうかがえる。

第二章で記したが、石橋・海賀の両名は新作落語に「新しさ」を求めた。だが、その一方で両名は「自然」であることや「品位」を求めた。これは一つの自家撞着である。その中で「模倣や本歌取り」が繰り返されることも妥当であったろう。

そう言った『文芸倶楽部』のコードの中を、みよしの家はくぐり抜けて掲載回数が最も多い投稿者となった。だが、みよしの家の新作落語は「落語研究会」で口演されることがなかった、またみよしの家の新作落語は岡の新作落語と異なり、現在まで口演されるに至っていない。この事実こそ『文芸倶楽部』の新作落語募集の問題点が集約されているだろう。

つまり、文芸形態として『文芸倶楽部』に掲載される新作落語と口演することを前提とした落語家の間に価値基準のズレが生じていたということだ。

『落語の落』によれば、三遊亭金馬が篠原春雨の投稿した新作落語「京浜美人」を「落語研究会」で口演した記録が残っている。篠原はみよしの家とは異なり、二度しか『文芸倶楽部』に新作落語は掲載されなかった。その短評も「近頃盛に行はるる福引きより思ひ付きたるものならし、左して傑出したる箇所もなければ、すらすらとして出来よし、落もまた無理ならず」と簡単なものになっている。なんらみよしの家と変わるところがないと言えよう。みよしの家の新作落語は石橋・海賀にとって評価されるべきものであった。だが、それはあくまで「石橋・海賀にとって」であり、普遍性のある新作落語だとは断言しにくい。みよしの家の落語が口演されなかった事実は、「落語の改良」に端を発する『文芸倶楽部』の新作落語募集に、大きな問題であったといえよう。

終わりに

本論文は、『文芸倶楽部』での新作落語の募集という特殊な現象を、文献調査、様々な観点で検証してきた。調査を進めていけば進めて行くほど、新作落語募集を検証する観点が多様になっていき、扱いきれなかったものが多数存在する。一つの現象として扱うには余りにも多面的で、本論文では回収す

ることが出来なかった事象が無数に存在する。

第一章では、新作落語募集の背景にそれまでの「改良」にまつわる言説が展開されていたことを明かした。

第二章では、選評者であった石橋・海賀、それぞれが持っていた落語に対する考え方が新作落語募集に影響を与えたことを明かした。

第三章では、実際に『文芸倶楽部』で掲載された新作落語に焦点を絞り、論を進めている。『文芸倶楽部』における新作落語募集が進むにつれて、紙面に掲載されることに特化する読者が生まれた経緯を明らかにした。

本論では扱い切れなかった多くの観点が、今回の現象には多く存在する。調査・検証を行う対象として、この様に恵まれた現象を扱うことが出来幸いであった。

【参考文献目録】

- ・『芝居小屋と寄席の近代「遊芸」から「文化」へ』倉田喜弘著（岩波書店・二〇〇六年九月発行）
- ・『近代演劇の来歴 歌舞伎の「一身二生」』神山彰著（明治大学人文科学研究所叢書・二〇〇六年三月発行）
- ・『演劇改良論集』近世文芸研究叢書刊行会編（クレス出版・一九九六年十二月）
- ・『改良滑稽落語』桃の屋鶴彦著（共隆社・一八八九年発行）
- ・『改良滑稽落語 第二集』桃の屋鶴彦著（共隆社・一八九〇年発行）
- ・『落語の年輪 江戸・明治篇』暉峻康隆著（河出文庫・二〇〇七年十一月発行）
- ・『落語の年輪 大正・昭和篇』暉峻康隆著（河出文庫・二〇〇七年十一月発行）

・『口演速記 明治大正落語集成 第一卷』暉峻康隆・興津要・榎本滋民編集・解説（講談社・一九八〇年三月発行）

・『口演速記 明治大正落語集成 第五卷』暉峻康隆・興津要・榎本滋民編集・解説（講談社・一九八〇年九月発行）

・『博文館 五十年史』坪谷善四郎著（博文館・一九三七年六月発行）

・『近代出版文化を切り開いた出版王国の光と影 博文館興亡六十年』田村哲三著（法学書院・二〇〇七年十一月発行）

・『落語全集』石橋思案編（博文館・一八九九年十一月発行）

・『落語の落 一卷』海賀変哲著／小出昌洋編（平凡社・一九九七年二月発行）

・『落語の落 二卷』海賀変哲著／小出昌洋編（平凡社・一九九七年四月発行）

・『岡鬼太郎伝』竹下英一著（青蛙房・一九六四年四月発行）

・『岡鬼太郎花柳文芸名作選 解説・論文集』三田純一著（鳳書院・一九八〇年十月発行）

・『江戸紫』岡鬼太郎著（鈴木書店・一九一二年発行）

・『投機としての文学』紅野謙介著（新曜社・二〇〇三年三月発行）

・『図説 落語の歴史』山本進著（河出書房新社・二〇〇六年五月発行）

【辞書類】

・『日本国語大辞典 第二版』日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（小学館）

・『明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧 東京大学法学部雑誌目次総覧 第五〇巻』（大空社・一九九七年発行）

【雑誌】

・『百花園』（金蘭社）

・『文芸倶楽部』（博文館）

【新聞】

- ・『読売新聞』
- ・『団々珍聞』

※『文芸倶楽部』については、八木書店『Web版日本近代文学館』、『読売新聞』については『ヨミダス歴史館』を主に利用した。いずれもデジタルDBである。

文字数

①三十二字（一行の文字数）×二十五行（一ページの行数）

＝八〇〇字（一ページの総文字数）

②八〇〇字（一ページの総文字数）×五十三枚（全ページ数）

＝四二四〇〇字（卒業論文全体の文字数）

※三五八五七六字（ワードによる文字カウント）